Fukushimaの「今」と「これから」

～提言：放射線への不安に対して～

2011年3月11日発生の東日本大震災に伴う東京電力福島第一原子力発電所（以下、原発）の事故以来、放射線に対する恐怖が蔓延しています。特に、放射線は小児への影響が大きいとされ、育児中のパパやママたちにとっては大きな不安となっています。

ヨウ素131や、セシウム137などの放射性物質から発せられる粒子線や電磁波を、「放射線」とよびます。どれほどの数の放射線が出ているかを「放射能」、「Bq（ベクレル）」という単位で表します。放射線がわたしたちの体に与える影響を「実効線量」、「Sv（シーベルト）」で表します。また、放射線を浴びることを「被ばく」とよび、地面に残っているセシウムなどから発せられる放射線による「外部被ばく」と、放射性物質を吸い込む、食べ物と一緒に摂取することによる「内部被ばく」の二種類があります。内部被ばくが特に危険、ということはありません。

被ばくすることでの人体への影響には、「確定的影響」と「確率的影響」があります。確定的影響とは、ある一定のレベル（＝しきい線量）を超えて被ばくすると現れる、やけどや脱毛などのことです。しきい線量は100～250mSv以上であり、原発周辺の一部の地域を除いて、今回の原発事故でわたしたちが被ばくするレベルではありません。確率的影響は、どれほど少ない線量でも現れる可能性があるものを指します。現在、子どもたちの将来の発癌の危険性が問題視されています。

今から67年前の、広島・長崎の原子爆弾投下後の追跡調査では、100mSvの実効線量では発癌致死率（癌を発症し命を失う危険率）が約1.05倍に増えることがわかりました。100mSv未満では発癌率が増えたというデータはありません。

大地の岩石や土などからは、自然の放射線が発せられています。世界平均では年間2.4mSv、日本では年間1.5mSvと云われておりますが、イランのラムサールという地域は年間10.2mSvという高い線量であることが知られています。ラムサールの方々に、特別癌の患者さんが多いということはありません。福島県中通りの原発事故後の空間放射線量の年間積算値は、大体6～7mSv程度です。ラムサール地域よりも確実に低いのです。

チェルノブイリでの原発事故の後、周辺地域の子どもたちに甲状腺癌が多発したことから、チェルノブイリを福島の将来と心配する方がいらっしゃいます。チェルノブイリでは、ヨウ素131に汚染された牛乳を子どもたちに飲ませ続けたことにより悲劇が生まれました。福島では、そのようなことはありません。現在も、県内各地でホールボディーカウンターによる小児内部被ばく検査が続けられ、一生を通じて被ばくする実効線量（預託実効線量）が算出されております。現時点で、健康に影響が及ぶ数値は認められておりません。

以上のことから、空間線量による外部被ばくも、食べ物などによる内部被ばくも、ほぼ、というよりも全く心配がない、福島の子どもたちの健康には影響がないということが云えます。紛れもなく、これが真実です。とはいえ、放射線の恐怖に脅えるパパやママたちもいらっしゃいます。それもまた真実です。内部被ばく検査は引き続き継続していただきたいものですし、県立福島医大が行っている甲状腺検診も意義ある事業と考えます。

やみくもに、「福島は安全」とがなり立てるつもりはありません。今だ故郷に帰れず、不安な日々を送られている方々がいらっしゃるのです。彼らの生活に平穏が訪れた時にはじめて、以前の「安心出来る安全な福島」に戻ったと云えるのではないでしょうか。何年、何十年かかろうとも、わたしたちはその日が来ることをあきらめてはいけません。

何よりも。おとなたちが不安な顔をしていれば、子どもたちも不安になるのです。子どもたちの輝ける未来のために、わたしたちこそが現実を直視し、しっかりと前を向き歩いていこうではありませんか。

二本松市
佐久間内科小児科医院
院長
佐久間 秀人

【経歴】昭和61年獨協医科大学医学部卒業。医学博士／日本内科学会認定内科医／日本小児科医会子どもの心相談医／日本禁煙科学会認定禁煙支援医／日本医師会認定産業医

二本松市本町1-237
TEL 0243-22-0570

●00ページに記事掲載

※福島県HP「ホールボディーカウンタによる内部被ばく検査について」　※佐久間内科小児科医院HP　http://sakuma1960.byoinnavi.jp/pc

【参考図書】『放射線と健康』（舘野之男 著・岩波新書）／『低線量放射線と健康影響～先生、放射線を浴びても大丈夫？と聞かれたら～』（放射線医学総合研究所 編著・医療科学社）／『放射能から身を守る本』（安斎育郎 著・中経出版）／『放射能のひみつ』（中川恵一 著・朝日新聞社）／『原発事故の健康リスクとリスク・コミュニケーション』（長瀧重信 企画・医学のあゆみVol.239 No.10・医歯薬出版株式会社）